

インデイステインクト+Q

第3話 呪いの原因

庫発りべるき

〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。
ださい。

なお本書での各法制度に関しては、二〇一四年九月二十一日現在の日本をモデルとしております。

〈本編開始〉

二十九歳の男は自宅のアパートでひっそりと過ごしていた。
た。

——アイツが、死んだ——

今後のことを悲観して。

これですべてを終わらせる。そういい残して——

男はある女性と付き合っていた。

二十七歳のその女性とは、結婚を前提とした付き合いをしていた。
していた。

だが——

女性は自ら命を絶った。

理由は、呪いを断ち切るため。
そんなメッセージを残して。

男は両親とは別居して暮らしている。

アイツを失ったことを思うと、イヤになってくる。

父さん、母さん、すまないが……

もう、孫の顔を見せることはできない。

アイツと結婚して、子どもを持つて……なんてことも、今となつてはむなししい想像である。

時間が経って落ち着いた頃に別の女性と付き合い、そして結婚……なんてことも考えられない。

そろそろ準備をするときだな。

もう、二ヶ月にもなる。

ある日のこと。女性が自宅のアパートに帰ってみると、一通の郵便物が入っていた。

ある市が差出人となっていた。

開封して内容を見る。

女性の父親が生活に困窮しているため援助できないか、というものだった。

一瞬、女性の体がこわばる。なぜなら——

確かにその「父親」は女性の実の父親である。しかしそれと同時に、恐怖を与える存在だった。

女性の実の母親はすでにこの世にいない。女性が幼い頃、病気で亡くなった。

その後、父親は別の女性と再婚した。

そして、それが悪夢の始まりだった――

再婚相手の女は女性につらく当たった。

お前なんていなくなればいい、目障り――などと暴言などで精神的に追い詰めることが日常茶飯事だった。

そういつた出来事がどれくらい続いたであろうか。

女性が小学生のある日のこと。

女性の様子がおかしいことに気づき、誰かが虐待を疑った。そして然るべきところに通報された。

児童相談所が女性を保護。親元で生活させるのはヤバイと判断されたため、女性はそこで生活することになった。

父親も継母の精神的虐待を止めるところか、愛されるよう頑張らなかつたお前が悪いと責め立て、児童相談所にも同様の主張をおこなった。

児童相談所としては親達の言い分を聞いたが、調査した結果を総合的に考えると頑張ると言う言葉で片付けていいわけでもないし、親達の言動は正当化できない。

しかしそういつた主張を繰り返している以上、改善は見込めそうにない。

こうしてしばらく施設で生活した後、ある夫婦のところ
に養女としていつた。

その夫婦にとっての女性は、血が繋がっていなくても

大切な娘だった。

だからこそ男は、夫婦に会うときにそれなりに気を使つたものだった。

女性の実の父親については念頭においていない。しかし、その夫婦についてはきちんと頭においておかなければ、なんてことも思つたものだった。

そして、女性は再び実の父親に怯えなくてはならないのかと頭を悩ませていた。

女性の実の父親が役所に生活保護を申し出た。そこで市が親族である女性に対して援助できないか問い合わせたのである。

確かに実の父親である。しかしそれと同時に、女性を苦しめることに加担した者である。そんな者を援助しろとはどういうことなのか。

女性は納得できないと感じ、役所に電話をした。

もちろんそこでは、自分の過去と役所からの問い合わせについての疑問について語つた。

そこで役所の職員が放つた言葉。

「法律上は扶養義務があるんですから、何とかできませんか！」

強い口調で責め立てるように言つた。

そのことが女性に恐怖を与えた。

親族扶養については、確かに法律で定められている。し

かし法律の内容や運用については、子が親を養う場合は生活の範囲内でよいとされている。

さらに子の資産だけでなく、養育を受けられたか否か、また、不当な言動をされなかったか、などといった要素も考慮される。

また、扶養の程度や方法については折り合いが付かない場合は裁判所がそれらを決定する。親族や役所が決定権を持つわけではない。

さらに法律では生活保護より親族扶養が優先的定められているが、その法律でも緊急に必要な保護を妨げるものではないと明確に規定されている。

結局女性が疑問を申し出て、最終的には役所側はこれまでの出来事から扶養させるわけにはいかないと判断し、女性に扶養を要求することを断念した。

ただ、役所側が責め立てるような言動をしたことについては不満と恐怖が残ったものである。

そして、これで終わったわけではなかった――

今度は実の父親が直接本人に迫ってきたのである。

女性の現在の自宅などの個人情報はどうやって調べたのかまではわからないが、あくまでもカネを借りるだけだと言いながら、自宅や職場にまで電話を掛けてくる。

もちろん返す見込みは期待できそうにも無い。

しかし自分のもとに押しかけられてトラブルになることも避けたかった。

結局女性は、返済される可能性が無いといってよい相手にカネを渡すことを余儀なくされた。

それも、何度も――

ある日のこと、女性は実の父親にこう言った。

「何度も借りに来るようでは返してもらえないかどうかもうアヤシイ。だからもう、貸せない、と。」

だがこれで要求がやむことは無かった。

ある日、自宅への電話で迫るようにならなくなった。

「いざとなったらお前の実家にまで借りに行こうと思っているんだがな」

それに対して女性は答えた。

「今のお父さんやお母さんには関係ないことでしょ！」
「なーに。ちよつと頼むだけだ。それだけなら罪にはなるまい」

そして実の父親はこうも言った。

「言っておくけどな、お前、俺の娘なんだから。俺、言われたんだぞ。娘さんに扶養義務があるから当たってみろつて。」

何ならもう一回役所に、お前に養わせるよう働きかけたっていいんだぞ」

女性は過去に市の職員に迫るように言葉を投げかけられたときのことを思い出し、恐怖を感じていた。

(また、責めてくる！)

さらに相手の口調から恐ろしさを感じ取り、しばらく考

えた。そして、こう言った。

「……わかったわ、ただ、お金をすぐには用意できないから、しばらく待って」

「ああ、いい返事を期待しているよ」

電話を終えた後、女性は悩んだ。このままではいくらお金を取られるかわからない。

いつまでこんなことが続くかも――

女性は思い切って警察に相談した。実の父親の迫り来るような言い方の電話も録音して、それも聞かせて、である。

しかしそれからしばらくの日数が経過すると――

警察は実の父親に事情は聞いたが、単に法律に基づいた扶養の要求や、人に頼んでみると言ったただだと答えたという。

警察としても警告程度に語りかけることはできるが、現時点ではそれ以上のことはできない。そんな答えが返ってきた。

それ以降女性はますます思い悩むようになった。

とても有効な助けは期待できそうに無い。

このままあの人と結婚すればあの人まで巻き添えを食わせることになる。

さらに自分に子どもができればどうなるのか。

子どもが成長したあと、今度は子どもにまでお金をたかられたり、援助を要求されたり、と、ありとあらゆるトラブルに巻き込まれかねない。

生活が困窮したからといってその原因とはいえないであろう者に、血がつながっているんだから援助しろ、と迫られて食い尽くされるのだろうか。

それを仕掛けてくるのは実の父親か、それとも、行政なのか――

そして、実の父親にカネを渡すことになっていたその日のことだった――

女性はどこかの高いビルの屋上から、飛び降りた。自らの意思で――

呪われた血筋を断ち切る。そう、言い残して。

そして「呪われた血筋」の意味を、結婚を考えていた二十九歳の男が知ったときは――もう女性がこの世にいなかった。

男はいろいろと考えていた。

アイツのために何かしてやれなかったものだろうか。

アイツなりに俺に気を使ってくれた結果、こんなことになってしまったのか。できれば相談してほしかったが、自分に対する女性の気遣いを思うと、とやかく言うべきではないな。

そして男はネット上であるブログを見つける。女性が管理人となつているものだった。

開設されてから間もないそのブログには、自分の本名や生い立ち、そしてここ最近の出来事についても事細かく書

かれていた。

もちろん、実の父親夫婦についても、である。

そして二カ月たった今、いろんな思いを胸に抱いて行動を起こすことになったのである。

男は自分が管理するブログを確認している。記事の公開時間をセツトする。そこには自分の今後の行動予定らしきものが書かれていた。

女性が管理するブログは本人の死亡が明確になった時点で管理する会社によってじきに消されるだろうと思い、早めに写しを保存しておいた。それも公開した。

実際、すでに女性のブログは削除されている。

そして、これまで抱えてきた疑問についても――

いくら生活に困窮した者がいるからといって、その原因とするのは不適切とされるであろうアイツが血縁関係を強調され、標的になってしまった。

生活に困窮する者が身内にいれば、責任があるとは言えない者にまで血縁関係を強調されて扶養を迫られることもあるのか。

この法律を使えば金目当てに親族にタカることもできるものなのか。

自治体側が結果的にタカリの手助けをすることにもなるのか。

事故はおろか犯罪の加害者でさえ被害者への賠償責任は被害に見合ったものでよい。だが、親族扶養ではいつまで

続くのか、どこまで負担させられるのかわからないことにもなりかねない。

それ以前に犯罪被害者の公的なサポートの必要性が叫ばれたのも、それが不十分だったために理由なき犯罪に巻き込まれたために本人はおろか家族までもが苦しむことになったことが少なくなかった。これはおかしい――そんな声が集まったからではないのか。

ましてやあの男は実の父親とはいえ、娘であるアイツに散々な被害をもたらしてくれた野郎だ！

今回の件では被害者に加害者を養わせる義務を負わせるという、もつてのほかの事態が引き起こされる可能性が大きかった。

これらのことを書き綴り、その上で男はこう書いた。あと少しで犯罪の加害者になるであろう自分がこんなことを言うのも変な話だが、と――

男は郵便局に向かった。今はすでに夜も遅いが、時間外窓口ならまだやっている。

「すみません。これを書留の速達で送ってください」
男が差し出した一通の封筒。それは男の実家の両親に当てたものだった。

次の日の朝、一台の白い車がアパートから出てきた。運転しているのは男だった。

運転しながらこれまでの出来事を思い出していた。

交際相手の女性が帰らぬ人となったあと、女性に扶養を迫ったとされる自治体はこんなコメントを出した。

親族扶養を要請したのは法律に沿ってのものである。誤解を招く言い方をしたのならば今後は気をつけていく、と。

男は思った。ふざけんよ。強要だとか脅迫って言葉、知らないのかよ、と。

女性が相談したとされる警察は、できるだけのことをしてきたがこんなことになって残念である、と関係者が語った。

そりゃ行き過ぎたことができないのはわかっているけどさ、あれだけのことをしたのだからもう少し踏み込んでもよかつただろうに。

だが今の男はそれらの出来事についてはあまり深く考えないことにした。

なぜなら、肝心の女性の実の父親を、自らの手で——そう考えたからである。

やがて男は自宅から遠く離れたショッピングセンターへとやってきた。

そして、買い物を済ませ車へと乗り込む。

武器を下手に持ち歩くより、現地調達してさっさと使ったほうがよさそうだ。そう考えたのである。

男がやってきたのはあるアパートだった。交通の差し障りになりにくい場所を選び、路上に停める。

いよいよ来たな。男はそう思った。また、自分が管理す

るブログにあの記事がでるのも時間的にもうすぐだ。そんなことも考えていた。

そのとき、駐車場で一台の緑色の車を見つける。

——アイツらは！

女性のブログに掲載されていた年配の男、女性の実の父親だ！！

そして助手席にいる年配の女性、あれが問題の継母か！男はその車に近づく。

「すみません」

車の中にいる人物に声を掛けた。

「ん？何ですか？」

「二ヶ月ほど前にお亡くなりになったあなたの娘さんについて、お話したいことがあります」

運転席にいた年配の男はめんどくさそうな表情を浮かべる。

「話すことはなにもありません！」

怒鳴るようにそれだけ言うと、けたたましくクラクションを鳴らし車を発進させた。

男は一瞬驚いたがすぐに自分の車に乗り込み、エンジンを掛けて発進させる。

男はあることを考えた。

——この辺は公共交通が不便な地域だろうし、生活保護からの自立に車があれば行動範囲が広がり職探しがしやすくなる。だから余程の高級車でもなければ車を持っている

者が生活保護を受けていても、俺は文句を言うつもりはねえな。

だが男は、こんなことも考えていた――

彼女の実際の父親とはいえアンタは彼女を散々苦しめて追いか詰めた！俺から逃げようとするなら止めるまでだ！

女性の実際の父親がバックミラーを見る。

住宅街の狭い道路を男の車がただならぬ様子で近づいてくる。

――マズイ！逃げなくては！！

男の標的となった緑の車は急ぐように大きな道路へと向かった。

そして何とかタイミングよく道路に入ることができた。

男の白い車が少し遅れて同じ道路に入る。若干無謀な入り方だったため、男の車に近づいていた別の車が驚きを表すかのようにクラクションを鳴らす。

男は標的の車を確認する。大きさは自分のと同じくらいか、少し小さいの普通自動車。

そして自分と標的の間に一台の乗用車が挟むように存在している。

ここは片側一車線の道路。何とか標的に追いつきたい。

男は直前の車を追い越そうとした。そしてその前にいる標的の緑の車の前にも回り込み、止めてやろうと考えた。

タイミングを見て追い越しをかけようと、反対車線に入る。

しかし前方から対向車が来ている。遠くにいるが無理に標的まで追い越そうとすれば正面衝突になりかねない。

無理はできないと判断し、手前の車だけを追い越し速やかに走行車線に戻った。

それでも追い越された側の車からは驚いたようにクラクションが鳴らされた。

それを聞いた男は申し訳無さそうな表情を浮かべた。

（すまない。どうしてもやらなければならぬことがあったんだ！）

やがて交差点に差し掛かる。前方の信号は赤。

しかし――

標的の車は速度を落としながらも強引に侵入し、左折。周囲の車が驚いて急ブレーキをかける。

男の車も強引に侵入する。

（ヤバイ！カーアクションじみたことが長引くと周囲がどんな巻き添えを食らうかわからない！

早めに決着を付けなくては！）

だが男の思いとは裏腹に、相手は車を止めそうにもない。

標的の車を運転している女性の父親、そしてその妻は何とか逃げ切れないかと思っていた。

（あの男は相当本気のようなだ！追いついたら殺されてしまう！）

そして――

どうしてよいか判断に苦しむあまり、思わぬところに入る。

つていった。

そこは高速道路のインターチェンジだった。

本来ならば通行券を取るべきところだが、逃げようとするあまりそれも取らないで入っていく。

一方、男の車はETC用のレーンを速度を落とすことなく突破。

入り口のバーを壊しつつ入っていく。

（すまない。あの車をどうしても止めなくてはならないんだ。

そして奴を——）

やがて二台の車は高速道路の本線に入っていく。

どんどん速度が上がっていく。

男はスピードメーターに目をやった。

時速百キロを超えている。

（体当たりで止めたいところだが……こんな速度ではうかつにぶつかるはこちらのダメージがでかくなるな）

男は慎重に攻撃の機会をうかがった。

緑の車はどんだんスピードを上げていく。

そのころ、前方では——

一般の普通自動車が二台、走行車線を走っている。

後方の車が前方の車を追い越すため、追い越し車線に出る。

かなり速度を出していた標的の車にとって、走行車線と追い越し車線、両方がふさがれた格好となった。

驚いてブレーキをかける。

男はチャンスと思い、慎重に近づく。そして相手の車の後方に接触。

相手は気が動転したのかハンドル操作を誤り、走行車線の、のり面に衝突。

のり面の傾斜とぶつかり方もあつて、車はひっくり返った。

天井が下に、タイヤが上にきている。

男の車は少し進み、路肩に止めた。そして車に備え付けの発炎筒を炊き、標的に近付いていく。

後方に事故を知らせようと右手には発炎筒を持っている。

しかし、左手には——

「手こずらせやがって、やれやれ。銃でも持ったりやよかつたんだが武器がこれじゃあカーアクションでどこまで使えるか。

まあいい。これで決着が付けられる」

標的の車に近寄る。

女性の実の父親であり、倒すべき標的の姿が運転席に見える。

標的となった者に身の危険がひしひしと伝わってくる。

——逃げなくては！しかし、体がうまく動かせない！！

男は持っていた発炎筒を走行車線に転がす。これで何か異変が起きたであろう程度のことは後方に伝われば良いが……。男はそう考えていた。

そして左手に持っていたカッターナイフを右手に持ち替え、何とかして逃げようと必死に体を動かす標的の男性の首を切りつけた。

それと同時にサイレンが聞こえてきた。一連の騒動から警察が動き出したようだ。

——目的は果たした。急ごう。そう思った男は——

パトカーが男のもとへと近付く。

警察官が数人、降りてくる。

そこで見たものは——

首を切り付けられた標的、そして——自らにも同様の攻撃を加えた男の、鮮血に染められた姿だった。

そして助手席では、女性が恐怖で震えていた。

一方その頃、ある家では——

「これを見てくれ！」

「どうしたのよ、あなた？」

「アイツ……なんてことを……」

それは男が書留、かつ速達で送った郵便物だった。

この夫婦は男の両親である。

息子は手紙でこのようなことを書いていた。

この手紙が届いている頃、自分は取り返しの付かないことをしているかもしれない。

幸い自分は成人しているから、両親が自分のしたこと責任を取る必要は無い。

ただどうしても自分は何かしらの賠償責任を負ってしま

う。財産を相続してもいいことはないだろうから、放棄したほうが良い。

そんなことが、である。

そしてこんなことも書かれていた。

「孫の顔、見せてやれなくてゴメンな」

恐る恐るテレビをつけてみる。そこで見たもの——

標的を自分の車で派手に追い掛け回した拳銃抹殺し、自らの命も絶った者がいたというニュース。

そしてその者の名は——自分たちの息子の——

一方同じ頃、別のある家では——

「そうか、その人が、俺達の娘の無念を晴らそうと——」

「あなた……」

テレビのニュースを静かに見守るように見ていた夫婦がいた。

それが——女性を実の娘のように育ててきた夫婦だった。

夫婦も娘の実の父親とその妻には相応の報いを受けてほしいと願っていた。

確かに願いはかなえられた。ただ、代償が大きかったな。

夫婦はニュースを見ながら考えていた。

義理の息子になるはずだったあの男が殺人を犯し、自らの命も絶った。このことをどう考えるか……

それからすぐのことだった。

自分たちの義理の息子になるはずだった男が世間でこんな評価を受けているということに。

インディステインクト プラスキュー + Q —

何かの暗号なのか。不思議に感じた俺はいろいろ調べてみた。

インディステインクト (indistinct)、英語で形状などが不明瞭な、といった感じの意味がある。

+Qについては、クエスチョン (question) から、人々がいろいろ追求してみたくなるほどの興味を寄せ付けてしまふ要素も含まれるといったことを表すようだ。

すべてがそうというわけではないが、インディステインクト+Qと呼ばれる者の中には、作戦の実行後、失敗した場合のみならず成功したとしても、寂しげな様子で自らの手で人生を終わらせる者が少なくない。

それも人々の興味を引きやすくなっている。

作業員という表現が適切かどうかかわからない形式で、かつ作業員のようなインパクトを与えるほどの言動を取った者をこう呼ぶようになったと考えられる。

但し本職の作業員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディステインクト+Qと呼ばれることもある。

そういったところでは定義があいまいなところもある。

それからさらに何ヶ月か経過したある日——
今まで俺は、娘とその彼氏のことを語ってくる立場だった。

これまでの出来事を俺は語ってきた。今度は俺が動く番だな。

そして、インディステインクト+Qになる番だな。

この考えは娘が死んだばかりでそのショックが大きすぎて沸き起こったものではない。

むしろ時間が経って少しは物事を考えやすくなったときに、どんな方法で決着をつけるべきか、と考えるようになった。

そして、娘の彼氏の行動に対する世間の注目がある程度収まってきたときを狙おうと考えたものだ。

実際、娘の彼氏の行動では、俺達夫婦もある程度は世間の注目の対象になっていたからな。

俺と妻は、やり残した標的をどうにかしようと考えた。

娘が死んだことで、俺達夫婦には子どもがいなくなった。

せめてもの救い、と言うのも問題発言だろうが、殺したかった奴は死んでくれた。

大声で言うわけにはいれないが：あの男、実に親孝行な「息子」だったよ。さすがはわが娘の彼氏さ。

とてもかなうはずのなかったであろう願いを、自らの命と引き換えにかなえてくれたのだからな。

行動を起こす前に、役所の奴らが取った言動について思い出してみるとしよう。

二十九歳の男がやった行動の後、厚生労働省があわてるようにコメントを発表したっけな。

厚生労働省では生活保護費を抑制するために、各自治体が必要扶養者の親族に養うよう促すことを進めてきた一面があった。

これにより保護を必要とする人が親族間の軋轢を恐れ、申請しにくくなるのでは、という懸念の声が聞かれたものだった。

それだけではない。あの男が娘の敵討ちをハデにやってくれたことで、親族扶養を強調して親族にカネをタカる事例があることが全国で次々と発覚した。

法律上、お前は俺を扶養する義務があるから養え。そんなところのようだ。

生活保護だって不正利用が良くないのは俺だってわかっているさ。だが結局、本当に防止すべき不正については矛先が生活保護から親族に移っただけで結局割を食うのはまじめに生活している者ばかりだったのさ。

で、親族扶養を促す方針を出した厚生労働省は、自分達の方針に問題があったとされたくなかったのか、こう言ったのさ。

「確かに親族に扶養をお願いするよう要望する方針を進めてきたのは事実です。しかし厚生労働省では、一歩間違えると金銭をめぐる親族間のトラブルを助長しかねないから慎重になるように、とも各自治体に言ってきました。

また、親族に不当にカネをたかることにについては、しかるべき対処がなされるべきだと考えております」

結局自分達の言うことを無視して暴走した一部の役所の職員、あるいは親族扶養を悪用する奴らの問題、ということとで幕引きを計りたかつたのだろうか。

まあいい。その「暴走した者」にもちよつとは痛い目を見てもらうか。

その前に――

娘とその彼氏が残した記録がインターネット上にある。ブログを利用していたが、二人が死んでしまったため、そのブログは削除されている。

しかし俺達はその内容を記録しておいた。その情報、存分に使わせていただくとしよう。

そして問題の自治体に戻ってきた。

俺達夫婦は一台のトラックに乗ってやってきた。それは結構大きなものだった。

中古で購入したものである。販売店には、大きな物を運ぶことが多くなり、手ごろな大きさのものがいいと説明した。

表向きの理由を言っておいたほうが怪しまれなくてすむ。

準備は済ませた。ただ――

俺は正直、これからやろうとすることに妻を巻き込むのは気が引けた。

そして妻に言った。

「言っておくけど、これから俺が、いや、俺達がやろうとしていることはかなり危なっかしいことなんだ。

やめておくなら今のうちだぞ」

そしてこうも言った。

「今なら自分が知らないところで夫が勝手なことをやらかしました、で済ませることが出来る。だが、これより先に進んでしまうと、もうごまかしは聞きそうに無い」

だが妻は、表情を変えることなくこう言った。

「今さら何を。もう、覚悟は決めています。」

と言うより……

妻はさらに続けた。

「あの子がなぜ自らの命を絶たなくてはならなかったのか……その理由を知った時点で、私も何かをするような、そんな気がしていたのかもしれない。」

それに……私達の義理の息子になるはずだったあの男の人が行動を起こしたと知ったとき……

そんな思いがますます強くなっていたものよ」

「そうか……」

妻よ、ありがとう。そして、「息子」になるはずだった娘の彼氏よ。ありがとう――

感謝の言葉の使い方に我ながらおかしいと思う。

あれこれ考えていると、あの市役所が見えた。

正面の出入り口は人の出入りが多い。無関係の一般人を巻き込まないように注意しなければな。

人の出入りが無い。今がチャンスだ！

「いいか、一気にいくぞ」

「わかった」

無関係の人達を巻き込まないよう十分注意しつつできるだけスピードを出して、俺はトラックを突っ込ませた。

正面出入り口の自動ドアのカラスはいとも簡単に割れた。

トラックの車高については大きすぎず小さすぎず、玄関をくぐる事ができ、なおかつそこそこの破壊力が期待できるものを選んだつもりだ。

周囲は騒然となった。それに構うことなくトラックを進ませていく。

そして、生活保護の相談する窓口になるであろうその場所のカウンターの壁にこすりつける形でトラックを止めて飛び降りる。

俺は大声で叫んだ。自分の娘の名前を叫び、そして――

「よく聞け、俺達はそいつの両親だ！なぜここに来たかは想像がつくよな!!」

それだけ言うと俺達夫婦は持参した出刃包丁で各々の首筋を思いつきり切りつけた。

娘に対する一部の市の職員の心無いとも思える言動は確かに許されるものではない。

たとえそれが、福祉の不正受給防止のためであっても、だ。

物事について不正防止策を計ることも必要なのはわかっている。だが、不正防止のためなら何をしてもいいってわけではないだろうに。

かといって職員に対しては危害を加えるのは過剰制裁になりかねない。

そこで俺達夫婦はこう考えた。

息子になるはずだったあの男を連想させる死に様を、あの市役所で見せ付けてやろうと。

そして、イヤでも心に刻み込んでやろうと――

こうして市役所には、俺達が使った凶器のトラックと、俺達夫婦の鮮血まみれの遺体が残ることになる――

同じ頃、ネット上には俺が管理しているブログが公開されている。

俺もあの二人に続く形でやってみることにした。

娘とその彼氏が各々のブログで残した記録を引き継ぐ形で公開した。

そして、こうも書いた。俺達夫婦の心中だ。ブログでは丁寧な言葉で書いたが、言いたかったことはこうだ。

親族だから養えっていうけどな、よほど金銭に余裕のあ

る状態でもなければ約束できるものじゃないぞ。

事故や災害など万が一のことが起きればちよつとの大金なんてあつという場に使うことになる。

そのときに備えて貯蓄するなり保険に入るなりしていれば、よほどの大金持ちでもなければみだりに負担を約束できる環境になくなってしまふものさ。

それに無事にいられたとしても、今度は結婚その他の大きな局面を迎えた場合の出費や老後の資金という問題が待っているものだ。

これらのことから扶養した場合の費用が積もり積もって後に影響を及ぼす可能性が大きいな。

それがどんな形で来るのか……いきなり大きく迫ってくるのか……小さな影響が徐々に少しずつ来るのか――

(終)

著者 庫発りべるき

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一四年九月二十八日

(C) Kohatsu Riberuki